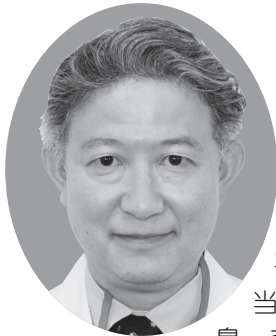




医師



第5回白鳥・市民健康セミナー 開催報告

神経内科部長 亀山 隆

平成25年11月9日(土)
当院講堂にて第5回白鳥・市民健康セミナー『がん医療の最前線』が開催されました。今回は、肝がん、乳がん、肺がんの3つのがんをとりあげて、最新の情報について講演が行われました。約180名の参加者があり、熱心な聴講と質問で予定時間を大幅に超過するほどの盛況でした。はじめに、加藤院長代理が参加者180名のうち、140人ががんにかかり、80人ががんで死ぬという統計を紹介し、「死に対して真剣にみつめない者は、生も真剣にみつめられない」という先哲の言葉を引用して「がんの勉強をしましょう」と挨拶し、開会しました。

最初は『肝がんの診療』について村瀬副院長が講演され、肝がんの原因になるC型肝炎やB型肝炎は薬物治療の効果で、肝がん自体は最近減少傾向にあるも、アルコール性肝炎の一部や非アルコール性脂肪性肝炎が原因になることを話されました。治療法として経皮的ラジオ波焼灼術、経カテーテル肝動脈化学塞栓術、がんの栄養血管の新生を抑える分子標的薬など手術によらない治療法を紹介され、また名古屋市西部医療センターで始められた陽子線による放射線治療にも触れられました。ただし、治療法や予後(病気の経過や生存期間)が、肝硬変などのもともとある肝臓の病気によって決まってしまうという限界についても話されました。

次に坂口外科部長が『乳がんって何』というタイトルで講演されました。女性で最も多いがんで、年々増加していること、死亡者は欧米では減少傾向にもかかわらず、日本では増加傾向で、その原因は検診率の低さにあることを指摘されました。外科治療では乳房温存術に加えてシリコンによって元の乳房の形に戻す乳房再建術が保険適応になったことな

どを紹介されました。早期治療により手術、放射線、薬の組み合わせで治る病気であり、そのためには自己検診と年に1回のマンモグラフィと超音波検査を加えた乳がん検診が重要であることを強調されました。

最後は松尾呼吸器内科部長が『肺がん診療の今』と題して講演されました。肺がんは日本のがん死亡の原因の第一位で、最大の危険因子であるタバコの喫煙率が先進国のなかで日本がまだ高いことが大問題であり、禁煙外来の宣伝もされました。肺がんの治療法や予後は組織型(細胞の顔の違い)や遺伝子型によって違ってくることを話されました。たとえばEGFRというたんぱく質の遺伝子の変異がある腺がんでは分子標的薬が非常によく効き、その正確な診断のためにはがんの場所から組織をとってきて細胞や遺伝子を調べる検査が重要であり、その方法として極細径気管支鏡、超音波気管支鏡、局所麻酔での胸腔鏡などの検査の進歩を紹介されました。しかし、まだまだ肺がんは治療が難しく、今後も増加傾向であり、やはり禁煙が最も重要であることを最後にも強調されました。

それぞれの講演の後、会場から活発な質問があり、皆さんのがんに対する関心の高さや身内のがん患者さんを思う切実な気持ちがよく伝わりました。自ら肺がんで手術をされた80歳の男性の方が、「私は手術をする必要があったのか」と質問をされました。最後の閉会挨拶で村瀬副院長が、その質問の答えになるようなお話をされました。がんの医療は進歩して治療の幅は広がっているが、それぞれの患者さんのさまざまな背景や嗜好や希望を考慮して、最も適した治療法を選択することがわれわれ医師の使命であり「個別化医療」が重要であると、心に残る言葉を述べられて会を締めくくりました。